

# 橋津古墳発掘調査報告

1978年3月

橋津古墳発掘調査団

## ご　あ　い　さ　つ

科学が発達し、合理主義という名のもとに私達の生活内容が急激に変革しつつある今日、「文化財保護」ということが、大きな社会的課題として取り上げられています。

殊に、古代文化を育んできた吉備地方においては、とりわけ、多くの課題が存在しているわけであります。

さて、このたび発刊しましたこの橋津古墳発掘調査報告書は、先年、平津児童館の建設に伴ない記録保存を図ることとして調査を実施したものであり、かねてより、各方面からこの調査報告書の作成が期待されていたところであります。

どうか、この報告書が地方史研究のうえの一資料として参考にして頂ければ幸いに思うものであります。

最後になりましたが、当発掘調査及び報告書作成をご担当賜わった調査団長である鎌木義昌先生をはじめ、関係者各位に対して、心からお礼申しあげる次第であります。

昭和53年3月31日

岡山市教育委員会

教育長　橋　本　進

## 本 文 目 次

|               |      |
|---------------|------|
| 1. 調査に至る経過    | 5 頁  |
| 2. 古墳の位置      | 6 頁  |
| 3. 発 墓        | 7 頁  |
| 4. 墓丘と墓丘の掘り込み | 10 頁 |
| 5. 石室の外形と断面   | 13 頁 |
| 6. 石室の構造      | 15 頁 |
| 7. 敷石について     | 16 頁 |
| 8. 遺 物        | 17 頁 |
| 9. 結 語        | 18 頁 |

## 挿 図 目 次

|                            |      |
|----------------------------|------|
| 第1図 位 置 図 .....            | 5 頁  |
| 第2図 墳丘測量図 .....            | 9 頁  |
| 第3図 石室外形平面図 .....          | 11 頁 |
| 第4図 古墳主体部断面図 ①縦断 ②横断 ..... | 12 頁 |
| 第5図 石室平面図 .....            | 14 頁 |
| 第6図 石室断面図 ①縦断 ②横断 .....    | 15 頁 |
| 第7図 石室下部敷石平面図 .....        | 16 頁 |
| 第8図 遺 物 .....              | 17 頁 |

## 図 版 目 次

|                  |  |
|------------------|--|
| 図版 1 ①④⑦ 発見当時の古墳 |  |
| 図版 2 ①⑥ 石室出土状況   |  |
| 図版 3 ①⑨ 石 室      |  |
| 図版 4 ①⑩ 石 室 内    |  |
| 図版 5 ①⑦ 石室壁面     |  |
| 図版 6 ① 石室北壁面     |  |
| ① 石室外の掘り方        |  |
| 図版 7 ① 石室外北部の掘り方 |  |
| ① 遺 物            |  |
| 図版 8 ①⑨ 石室下部の敷石  |  |

## 例

## 言

- 1 本報告書に使用した石室関係測量図・実測図は、新東晃一、福田正継氏などを始めとする、岡山理科大学・順正短期大学考古学部学生諸君の手によるものである。
  1. 報告書に使用した石室関係実測図のトレースは、すべて新東晃一氏が数年前に作成したもの。
  1. 墳形測量図のトレース、古墳位置図の作成及びその他のトレース図の修正などは、岡山市教育委員会の出宮徳尚氏を煩わせた。
  1. 遺物の実測図とトレースは、すべて正岡睦夫氏による。

# 岡山市 檜津古墳

児童館建設にともなう緊急調査概報

鎌木義昌

## 1. 調査に至る経過

昭和43年6月19日、旧一宮町当局より緊急の連絡を受けた。当時、一宮町では、町立児童館建設のための整地作業・土取り工事などを行なっていたところ、大字櫛津字上屋敷2173番の土地より古墳一基を発見したとのことである。早速、岡山県教育委員会と連絡を保ちながら現地の状況を調査したところ、ブルトーザー工事により、現地はかなり広く削りとられており、その一端に、天井石、石室の一部が取り去られた竪穴石室古墳が認められた。

早速、岡山県教育委員会、一宮町当局などと処理対策を検討した結果、整地作業を一応中止するとともに、約一ヶ月の予定で、緊急発掘調査を実施することとなつたわけである。

ただちに、文化庁宛に、破壊された天井石・石室の一部分を除去し、実測・発掘を行ない、記録に残すこと目的として、緊急発掘調査届を提出し、6月20日からその作業を開始することとし、引き続き発掘調査準備にとりかかったわけである。（図版1参照）



## 2. 古墳の位置

遺跡は岡山県岡山市橋津字上屋敷2173番に所在する（旧一宮町）。

地理調査所1/25000地図「岡山北部」を見ると、その西部に、横井の谷を南下する笹ヶ瀬川が認められる。この笹ヶ瀬川は、やがて、坊主山と鳥山の間にある狭い低地を抜けると、急に西方に流れを変えている。この西方に流れる笹ヶ瀬川の北側には、坊主山から西にのびる山塊があり、山塊には3つの峯が知られている。東から標高100mの坊主山、次いで標高93.2mの峯、西端が標高95.5mの峯となっている。この西端の95.5mの峯から南にのびる尾根があり、この尾根の南端は、西に向って崖面を形成している。遺跡は、この尾根の南端、西に崖面を形成する部分に存在する。

調査当時、この橋津古墳の位置に立つと、西の崖面の下には橋津に所属する人家が認められ、南には、山裾に接して、岡山市西坂から、首部、東橋津、中橋津など、山裾を通って橋津に入る旧道が通り、この旧道と笹ヶ瀬川の間には、水田が拡がっていたし、この水田地帯は更に西方に拡がり、それを越えて、吉備津彦神社、吉備津神社の所在する吉備中山（標高175m）が望まれた。

遺跡から遠望される諸地域および、その東方、あるいは西方の旧山陽道に接する地域は、岡山県南部でも、特に古墳の多い地域として知られておる。

整地作業により、古墳の一部が露出された当時、古墳の位置する尾根の東部は、ブルトーザーによって削りとられ、崖面を形成していたので、尾根の旧状は推定による以外になかった。石室の一部が露出している様子から推察して、尾根の幅は東方に拡がり、徐々に高度を減ずる状況であったと考えられる。また、石室の構築された地表面は、ほぼ平坦で、石室上部の平坦面が、周辺と比べて、約25cmぐらい高くなっていたことが、測量によって認められた。つまり、石室を中心として、径10数mの範囲が不整形の高まりとなっており、この部分に墳丘が形成されていたものと推定した。この状況から見て、墳丘の旧状は推定することが困難ではあるが、すくなくとも、盛土をもった墳丘が存在していたことは否定出来ない。しかし、この墳丘が、どのようなプランを持っていたかについては、推定することが困難であった。また、墳丘の北部の墳丘の一部と考えられる部分に、古墳の天井石に類似する巨石が認められたが、これはその後の調査で、下部に人工の認められない露岩であることが判明した。さらに、切り崩された東部の崖面に露出していた巨石も、その後の調査で明らかとなった石室構築のための掘り込みに対して、壁面に突出していた巨石であることが明らかとなった。

ブルトーザーによって削られた東部断面には、板石を使用した天井石の一部がのぞいておりその天井石は、整地作業のブルトーザーのため、二つに折損しており、その下部に石室の壁を構成していた円礫角礫が崩れた状態で散乱していた。この部分から中を覗くと、わずかの空間があり、西の壁面も同様の石で構築されている可能性が強く、竪穴式石室古墳であることが推定された。さらに削り取られた崖面の一部には、地山を切り込んだ痕跡があり、石室構築前に、掘り込みのなされた可能性が推定された。

### 3. 発掘

発掘は6月20日から7月4日まで継続し、一応の作業を終ったが、石室が取り去られるため、石室の石積みの状態や、下部の石敷の状況を記録するため、7月13日から7月17日まで、実測作業を行なっている。

また、この緊急調査は、あまりにも急な調査のため、作業員の調達が殆ど不可能なため、岡山理科大学及び順天短期大学の学友会考古学部の学生諸君の協力を得ることとした。しかし、学生にとって、まだ夏休暇前であるため、授業の合間に作業をし、さらに夜間作業を強行することによって、作業日程を進めて行くと云う、きわめて変則的な発掘となった。夜間作業を行なうためには、発電機の調達を必要とするし、夕食・夜食の手配も行なわなければならない。発掘準備は困難を極めたが、ようやく、20日からの発掘を行なうことが可能となった。

発掘日誌の記載は不必要かとも思うが、この変則的な発掘の実情を明らかにしておくことも、ある意味では必要であるかとも思われる所以、一応記載することとした。

6月20日、早朝より福田・江原参加。石室のほぼ中央と思われる部分に水糸を直角に引き、墳丘断面の表土の部分を実測。切り崩した東部の土層の層位を明らかにするため断面の清掃にとりかかる。夕方より新東・三垣・池畠・森田他2名参加し作業を午後10時まで行ない、タクシーで帰る。

6月21日、新東・福田12時より参加。三垣・真鍋・池畠・山本・江原夕方より参加。天井石上部の盛土除去作業を始める。午後10時、タクシーで帰る。

6月22日、三垣・山本・江原・二宮・中村・赤壁12時より参加。新東夕方より参加。作業継続し、10時帰る。

6月23日、新東・二宮・山本・江原・森田・木下・小川・赤壁・則本・木下・前手・弘野・田中・木口・本水・西・岡野・長谷・吉田・黒川・椿・庄司・徳山など、早朝より作業を開始し、夕方作業を打ち切る。本日は昼間作業のため、石室内の発掘を開始するとともに、実測作業を行なう。

6月24日、朝より新東・則本・木下・前手作業開始。12時より福田・池畠・江原・島村参加す。作業継続。2名を除き10時まで発掘・実測を行ない帰る。

6月25日、新東朝より作業開始、12時より江原・小川・島村参加。夕方より福田・池畠・他2名参加する。発掘・実測作業を継続し、午後10時タクシーで帰る。

6月26日、新東・三垣・福田・池畠・江原・則本・弘野・田中夕方より作業を始め、午後7時30分打切り帰る。

6月27日、新東朝より作業開始。三垣・福田・池畠・江原・藤井夕方より参加、午後10時帰る。

6月28日、福田・則本・木口・本水登より作業開始。福田を除き、他3名夕方帰る。夕方より新東・池畠・山本・江原・島村参加し、実測を行ない9時ごろ帰る。

6月29日、新東・島村朝より実測作業開始。12時より池畠・則本・木口・本水参加。夕方より福田・江原・小川・赤壁・仲田・中野参加。一部を除き午後10時まで作業を行なう。

6月30日、新東朝より作業開始。すこしおくれ、池畠・江原・小川・福田・則本・木口参加し、夕方作業を終る。

7月1日、新東・福田・小川実測・発掘を行なう。

7月2日、1名作業をする。

7月3日、6名作業する。

7月4日、1名実測作業を行なう。

引き続いて、7月13日からの実測には、7月13日、2名。

7月14日、2名。

7月15日、8名。

7月16日、なし。

7月17日、9名。

7月18日、1名。

7月19日、7名。と記録に残されている。

7月19日の実測を最後にこの調査を終ったのであるが、この間、6月20日から7月4日までの間に、石室断面図作成のための墳丘上面の実測、直交する水糸に沿って天井石上部の封土除去、石室上面の断面実測、天井石の除去、石室内の発掘、石室内の実測、石室構築のための地山面からの掘り込み発掘、掘り込みを中心とした測量図の完成の順序を中心とした作業を行なっている。

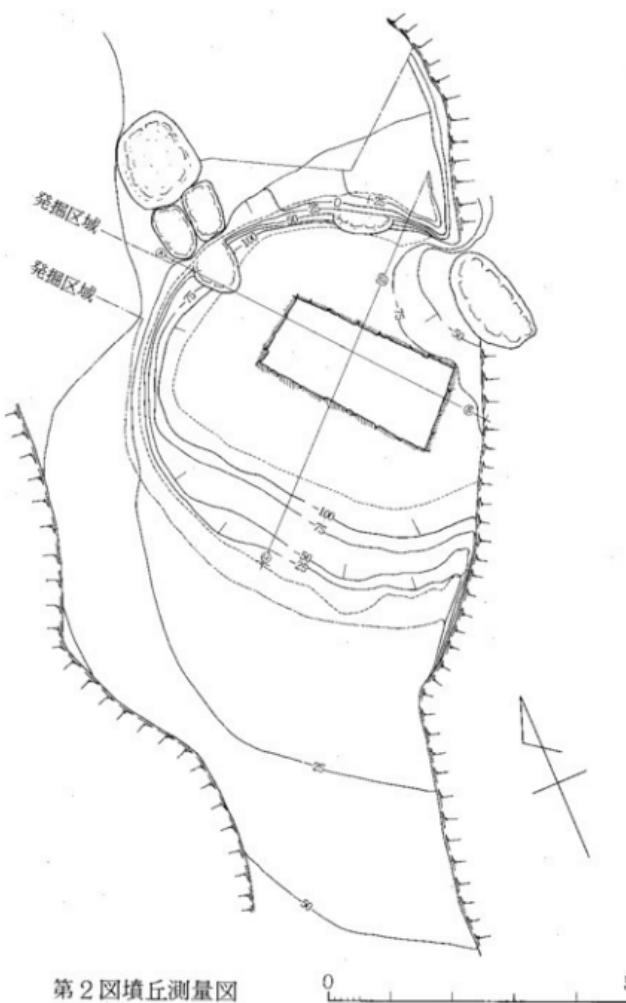
また、7月13日から7月19日までの作業は、石室の壁面除去の作業にしたがって、石室壁画の断面図、石室除去後の敷石の実測などを行なっている。

前述の順序にしたがって発掘を行なったのであるが、天井石上面の表土は20—30cmの深さで、黒褐色を呈し、これを除去し終ると、褐色の土層がのぞく、この褐色の土層の中に天井石が置かれている。この褐色の土層は、詳細にみると、石室に接する部分と、それからやや離れた部分では、やや色調が異っており、当初断面観察の際、石室構築時の掘り込みが認められていたので、注意しながら、違ひの境界部分を追って行った。その結果、後記するような掘り込みの輪かくがあらわれたのである。

天井石は三枚の板状の石が使用されていたのであろうが、西端の一枚と考えられるものは無く、この部分が盜掘孔となつたようである。中央の石は二つに折れており、東端の一枚と考えられるものも、前に述べたように、ブルトーザーにかかって折損したものとみえ、二枚に折れていた。

石室内には土が一杯で、天井石との隙の部分にやや空間が認められた。室内を埋めた土の中には、瓦片などがかなり混入しており、室内を意識的に埋めた痕跡と考えてよい。石室内の土除去にあたつては、夜間作業だと見落すおそれもあるので、昼間の作業のみに限定して行なつた。そのためか、埋土中より細い碧玉製管玉4個と、あまり質の良くない硬玉製小型変形勾玉1個が発見されている。埋土を除去すると、床面には板状の敷石があり、板石を組み合せているが、すき間があり認められないので、細部を加工して組み合せているようである。

また、この板石のうち、中央部のものは、大きく欠ぎ取られている。これは盜掘者が、副葬品



第2図 墳丘測量図

をねらって、石を欠ぎ取り、その下部に副葬品が残されていないかを調べた結果と考えられる。そのためか、この面では何等の遺物も発見することが出来なかった。つまり、この古墳の発掘に関する限り、遺体を埋納した当時の副葬品は、原位置ではまったく発見されなかつこととなる。

この石室内の埋土除去作業に平行して、石室構築当時の掘り込みの状況を明らかにするため、石室外の発掘を行なった。掘り込みは地山面でのみ、その掘り方が判明する。掘り込みの中を埋めた土と地山の色とは、なかなか判別困難であるが、詳細に注意して掘れば判別可能で、この部分も、夜間作業では困難なため、昼間の作業にのみ発掘を実施した。このような発掘を通じて、石室壁面の石積みの状況などを観察したが、それぞれの部分で、その状況をまとめてこととした。

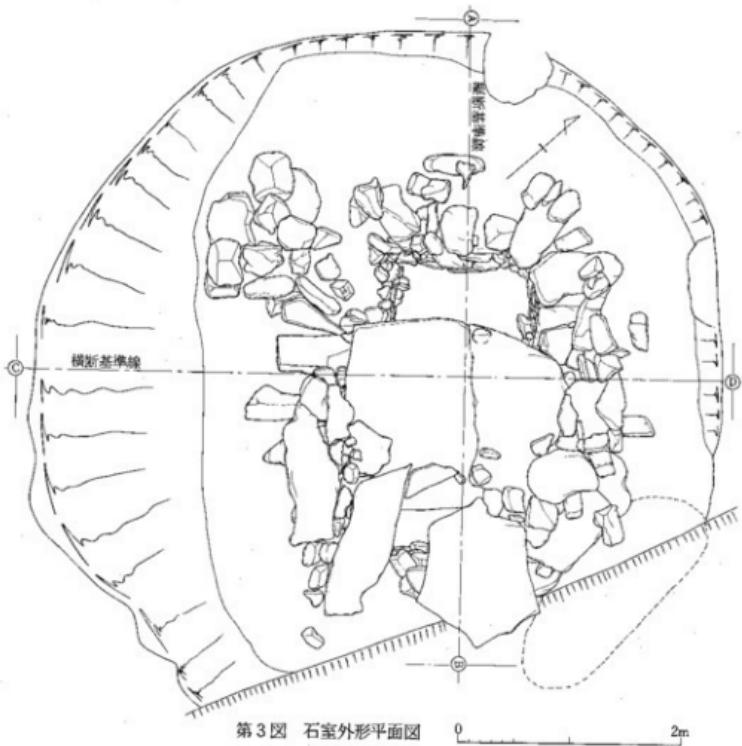
発掘期間を通じて、困難を乗り越えて参加した岡山理科大学・順正短期大学の学生に感謝の意を表したい。

#### 4. 墳丘と墳丘の掘り込み

第2図の墳丘測量図は、墳丘に設けられた石室構築のための掘り込みの、埋土を掘り上げた後の測量図である。

西の崖面と、ブルトーザーによって作られた新しい西の崖面との間に、細く尾根が残されており、その残された尾根をえぐるように掘り込みの全容があらわされている。東側は崩されているため、詳細は判らないが、掘り込みの上面は径約6mの円形を呈しており、深くなるに従い下部では、南北4m強、東西では5m以上の楕円形に変っている。切り込みは、地山面で認められるのみであるため、ほんとうの深さは明らかでないが、地山面から約1m50cm前後の深さとなっている。この大きさは、石室裏面の控え積みの石などをふくめて、南北約3m50cm、東西約4mの石室構造をいれるに適當の大きさと考えて良いだろう。また、天井石上面から、敷石下面までの高さが1m50cm前後であることは天井石の上面が地山の高さとほぼ一致するわけで、当初から、構築する石室の大きさと高さを予定に入れた設計と考えてよい。つまり石室が完全に、すっぽりと掘り込みの中に入る大きさを予定した掘り込みの規模ということになる。

第4図の断面図を参考とすれば、掘り方はかなり急傾斜で、比較的整然と掘り込まれており、底面は平坦となっている。しかし、この掘り方にやや乱れが認められるのは、北部から東部にかけてであり、これは、掘り込みの側面から内側にかけて巨石が露出し、これを除去することなく、石室を構築したためと考えられる。特に、東部の一巨石は、地山中に喰い込んだ形で発見されたものではなく、埋土中に、掘り込みの下部にのっかった形で発見されており、あるいは、掘り込み作業中、計画された地下から発見されたため、掘り込み穴から取り出し、他處に捨てるのが困難なため、掘り込み穴の端に移動させ、そのまま埋没せってしまったのかも知れない。また、北にある巨石群は、その一部分を掘り込み中にのぞかせているが、地山に喰い込んだ形で発見されている。発掘当初、地表面からの観察では、古墳に關係ある遺構か、祭祀に關係ある遺構ではないかと注意されていたが、地山に喰い込み、下部に何等の遺構もないため、遺跡とは關係ない露岩と考えるようになった。またこの巨石は、現在では4つにわかれているが、もともと1個の巨石が、自然に分割された可能性が強いことも判明した。

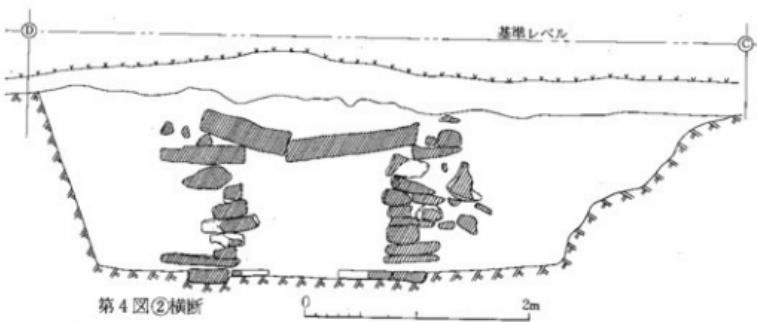
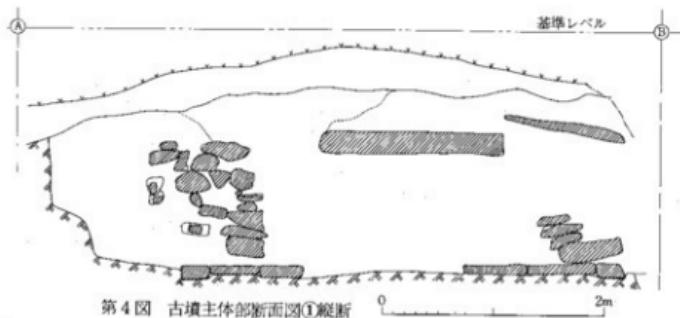


第3図 石室外形平面図

0

2m

この掘り込み穴の観察により、以下に述べるような古墳築造の順序が想定された。まずこの穴は円形に掘り込まれて行った。ある段階に達すると、築造される石室の外型を考えて、橢円形の掘り込みに変えて行ったのだろう。一定の深さに達すると、底面を平らにする作業が行なわれた筈である。底面が平らになると、今度は石室の築造となるが、その前にまづ、石室の長方形プランよりやや大きく、板石を敷く。板石と板石のすき間を無くするため板石にこまかに加工を加えた筈である。この板石の上に側壁の石を積み上げて行ったわけであるが、その過程で裏の控石を入れながら徐々に周辺を埋めて行ったようである。この上に天井石をかぶせるわけであるが、それは埋葬後であることは疑うことが出来ない。最後に盛り土をし、この古墳の築造は一応終ることとなる。



## 5. 石室の外形と断面

第3図・第4図参照。石室の天井石は前述の通り、3枚で構成されていたようである。中央の1枚は特に大きい。中央部で2つに折れ、折れた部分に向って、やや傾斜し落込んでいる。約2m × 1m 70cm ぐらいで、厚さは、20cm前後である。東の1枚は、ブルトーザーに一端を引っ掛けられ、2ないし3に切断されている。南にある切損した一部が原位置を保っているとするなら、中央の石のかぶさった形だったろう。引っかけられて動いたと考えられる破片は、北側にややづれた形であり、その西にある小片にくつけて復元すれば、天井石としての機能を充分にはたすけたのである。この天井石の復元した大きさは、約1m 50cm × 1m 30cm ぐらいで、厚さは、厚い部分で10cm、薄い部分で5cmである。中央の天井石にかぶさった部分は薄い5cmの部分である。石室の西端には天井石が存在しなかったが、盗掘にあたって取りはずされたものであろう。このあいてる部分は、40cmないし50cmなので、1枚の天井石があったものと推定している。残存する2枚の天井石は、厚さに差もあるが、偏平な板石を使用している。また、この2枚の天井石が、石室の壁面に接触する部分に、天井石を被うような形で、相当量の板石が認められている。当初から、被うという意図のもとにおかれていたものと考えている。さらに、石室から離れて、その西南部に、石群がまとまって発見された。下部に何等の遺構も発見されていないので、意図的な石群と考えることは出来ない。

第4図の古墳主体部断面図は、主として、石室と掘り込みの関係を明らかにしている。この図をみれば、側壁の積み石の、下部2ないし3段ぐらいまでは、外側の控え積の石が見あたらない。つまり、この部分までは土のみで埋め、その上の埋没にあたって始めて、控え積みの石が使用されたようである。石室の長辺を示す図のうち、向って右側、つまり、石室の東部の石積が、内部に強く傾斜しているのが認められる。これは決して持ち送りを示すものではなく、ブルトーザーの力によって内部に傾斜した状況を示している。

側壁につまれた石は、下段のものは比較的偏平な割石が使用されており、上段は、円錐あるいは角礫状の割石が使用されている。つまり、崩れ難い下段の部分には外側に控え積みの石が無く、上段の崩れやすい部分にのみ控え積の石が認められることは興味深い。この状況は図版中の石室壁面の写真を見ても、石室内部の石積の状況が明瞭である。また、石室石積の最上段には、細長い石が放射状に積まれており、石室の壁面上端部の押さえを意図したことがうかがえる。この押さえの石は、側壁積の石から外に伸び、掘り込みの埋土中に深く入り込んでおり、天井石をのせる際の安定をも考えていたようである。除去された天井石のあったと考えられる、西端には、他の部分と比べて側壁上面の石がすくない。これは、天井石の除去にあたって取り去られたものと考えて良いだろう。あるいは、前述の石室外西南部に発見された石群が、この取り去られた石なのかも知れない。

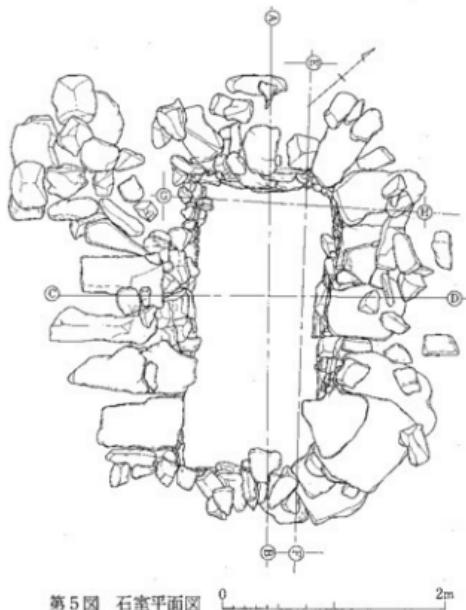
第3図に示した、石室外形の括りは、4m 50cm × 3m 50cmで、前述した通り、この大きさは、掘り込み中に石室を構築するにあたっての、作業可能な限界示しているようである。

## 6. 石室の構造

天井石などを除去した後の石室平面図が、第5図である。また、第6図は、平面図に示した位置での断面図となっている。

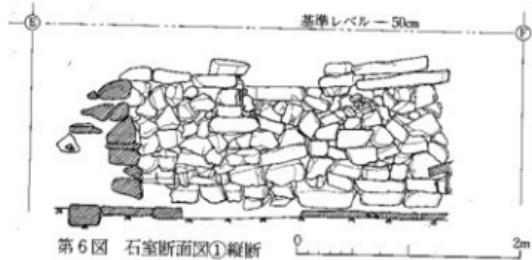
石室の長さは、約2m70cmで、幅は、北部・南部ともに約1m20cmである。また、敷石面から天井石までの高さは、1m10cm前後で、長方形の箱形石室となっている。壁に使用されている石は、前に述べたが、下部の2-3枚は、偏平に近い割石が使用されており、中段から上段にかけては、円礫状小量と角礫状の割石が使用されている。また、壁の最上段には、比較的大型の板石が並べられている。注意しなければならないのは、敷石と最下部の板石の間は、例外なく土で埋められており、敷石に対して、壁は浮いた状態となっている。この状況は壁面の石が取り去られた後にも明瞭であり、壁の石を積み上げる前に意識的に土を敷いたことは疑えない。ただこの土敷が敷石の上面に一様に埋められたものか、壁の下部にのみ敷かれたものかについては、いづれであるか、確証を得ることが出来なかった。

壁面の石積は、いづれの断面図を見ても判る通り、持送りの傾向はまったく認められず、むしろ、外がわに反するような傾向を示しており、真直ぐに積み上げたものと考えて良いだろう。（前にも述べたが、南壁はブルトーザーによって押されたため、内側に傾いているが、これも当初は、

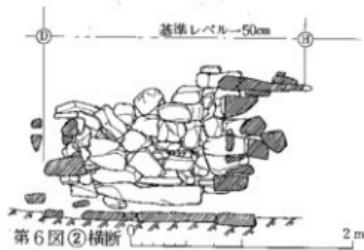


第5図 石室平面図

真直ぐに積み上げたものと考えて良い）。石積みはかなり荒く、かなりの量の土が、石と石との間に発見され、石積みの過程で、つめられたものであることは疑えない。



第6図 石室断面図①縦断



第6図 ②横断

## 7. 敷石について

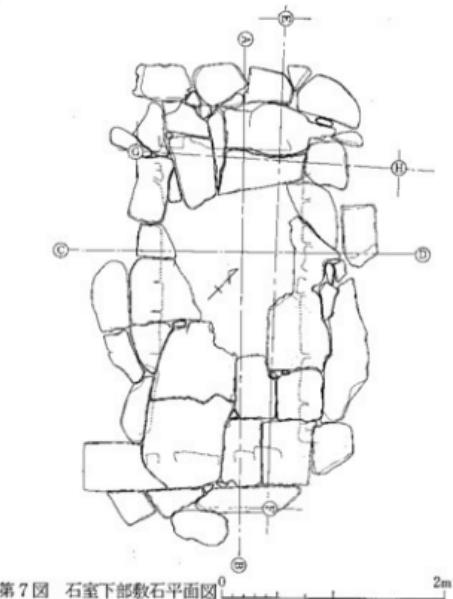
敷石は偏平な板石を組み合せて構成されている。板石と板石の間は隙間がすくなく、接触部を加工して組み合わせた可能性が強い。

中央からやや北寄りの部分にかけて、板石を欠除する。盗掘者によって北の天井石がはずされ、その下部を中心として板石を剥ぎ取ったものようである。あるいは、副葬品を探して板石を剥がしたものかも知れない。

板石の配列されている部分は、石室よりかなりひろく、石室構築にあたって、当初よりかなりの注意が払われたと考えられる。板石の厚さは、ほぼ6cmから10cmまでの偏平な石が使用されており、厚さに若干の差異はあるが、平らに削った掘り込み内の地山面を、石の厚さに応じてさらに削って敷設している。先に述べたが、この敷石面と壁の積み石との間に若干のすき間があり、土が埋められていたことは、どのような効果を考えたのか理解し難い。

敷石の大きさは不揃であるが、特例を除いて、径6—7cmの角ばったものがもっとも多い。第7図に示した敷石の平面図では、南の石室幅がやや拡がっているが、壁に使用されている石が、一辺のみ急激にまがっているためで、このまがりは意識的なものではないようである。

敷石の敷かれた範囲は、約4m50cm×2m50cmの範囲で、掘り込み下部の平らな部分に対して、ほぼ中央の位置を保っている。



第7図 石室下部敷石平面図

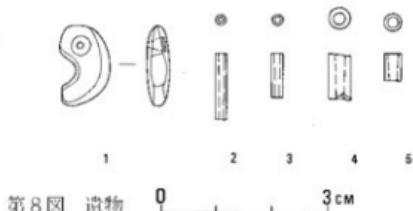
## 8. 遺 物

発見された遺物は、いづれも浮土中から発見されたもので、原位置と考えられるものはまったく無く、硬玉製変形小型勾玉1ヶと、細い管玉4ヶである。

第8図1が勾玉、2・3・4・5が管玉で、その概要を記しておこう。1の勾玉は、あまり良質でない硬玉でつくられた、全長14mmの偏平なものである。背部と尾部の尖端は丸く磨がかれているが、内曲した部分の研磨はやや平らである。体部から尾部にかけての厚さに対して、頭端の部分は極度に薄くなっている。頭部の穿孔はこの部分に施こされており、入り口が大きく出口の小さい、一方からの穿孔である。大きい穴は3mm、小さい方は1mm強となっている。頭端部が薄く、全体が偏平であることなど、一般の勾玉とはやや違った特徴をもっている。

管玉は全部で4ヶであるが、第8図の番号にしたがって眺めてみよう。まづ2の管玉は極めて細い管玉で、径は2mm強、全長12mmのもので、穿孔は1mm弱であるが、一方がやや広く、他方がやや狭く、徐々に径を変えている。石質は碧玉で、発見された管玉の中ではもっとも長いものである。3の管玉は2よりさらに細く、径は2mm弱で、全長は8mmである。穿孔は一方が1mm強で、他方が1mm、大きい穿孔から小さい方にかけて、径を徐々に狭くしている。そのため、穿孔の大きい側では、管玉の壁の部分が極度に薄くなっている。碧玉製。4の管玉は、径が4mm、長さが

8mmであるが、一端が折れている。この折れた断面をみると磨滅がみられ、折損の時期については判定し難い。穿孔は一方が2mm、他方が2mm弱で、これも大きい孔から小さい方にかけて徐々に径を減じている。これも碧玉製品。5の管玉は、径3mm、長さ5mm



第8図 遺物

のもので、穿孔は大きい方が2mm、小さい方が1mm強で、大きい孔から小さい孔にかけて径を減じているのは、他の例と同じであるが、径の減じ方は、他の例より、やや急である。同様に碧玉製品。以上4個の管玉は、他の古墳出土の管玉に比して、いづれも細形で、そのうち特に2・3のものが特に細形となっている。また、これらの管玉の長さは、最長のものが12mm、もっとも短いものが5mmで、この点も他の古墳出土の管玉に比べると、かなり違った特徴をもっている。

以上取り上げた勾玉・管玉を通観して、これらの副葬品が示す年代を、かなり古く考える点については誰も異議はないだろう。さらに、これらのものを、4世紀ないしそれ以前の製作と考える点についても、あまり強い反対はない筈である。しかし、この製作年代をさらに限定することについては、その決め手を欠ぐわけで、弥生時代製作の可能性をのこした製作品であると推定している。

## 9. 結 語

以上、この古墳についての概要をのべたが、発見された副葬品の量がすくなく、その多くが盗掘されたものと推定せざるを得ないことは誠に残念であった。しかし、古墳の構造がかなり良く残されており、築造の為の掘り込みを明らかにするとともに、敷石という特異の構造を把握したことなどは、一応の成果と考えてよからう。

最後に、この古墳の特徴を総括し、その性格についてすこし考えてみよう。先づこの古墳の特徴の一つとして取り上げられるのは、尾根の尖端部に造られた古墳であり、地表面から地山を深く切り込んで、石室を構築するための掘り込みを造っていることである。第二の点として、この掘込の底に板石を敷きつめた敷石の配列があることが取り上げられよう。第三は、石室の構築にあたって、石積と敷石の間に土を敷き、その上に、まず板石積みをし、中間に、円礫と角礫状の割石を積み上げ、その上部に長い板石の短辺を石室内に向けて並べている点があげられる。さらに、石積が垂直で、持ち送りのないことも石室に関係した特徴として取り上げて良いだろう。竪穴式石室の壁に角礫状の割石を使用した4世紀と推定される古墳として、備前車塚古墳、三角縁鏡を出土した天神山I号墳などがあり、絶社市宮山墳墓群中の前方後円形をした墳丘を持つ竪穴式石室も同様の石が使用されている。

発見された残存副葬品は、極めて小量であったが、硬玉製勾玉、碧玉石管玉のいづれを取り上げて見ても、古墳で発見される一般的なものとかなり違った特徴のものばかりと云えよう。

このように、立地、石室の構築、副葬品の三つの面で特徴を取り上げてみたが、いづれの場合も古い古墳の特徴をそなえている。副葬品の製造された年代が、そのまま古墳の年代を示すものでないことは、自明のことであるが、古墳の構造の各特徴が古式であり、副葬品自体が古い製造年代を示すものであるなら、その古墳は、古墳時代としては、古い年代に築造されたものと考えて良いのではないか。立地、地山を掘り下げてつくった石室築造のための掘り込み、號面に積み上げられた割石、勾玉、管玉の古い様相など、いづれの点をとり上げてみても、すくなくとも4世紀を降らぬ古墳である可能性を示している。そのような意味で、私はこの古墳を4世紀を降らぬ古墳であると推定している。

以上、古墳年代の推定をもってしめくくりとし、ペンをおきたいが、最後に、全期間を通じ、発掘・実測・整理に協力された、前述の岡山理科大学・順正短期大学の考古学部学生を始め、旧・宍道町役場・教育委員会の関係者、発掘を始め種々の面で協力をいたいた三杉・正岡・椿・黒住の諸氏、および本報告書の作成にあたって協力をいたいた岡山市教育委員会の関係者に感謝の意を表する。

## あとがきにかえて

この報告書は、昭和43年6月、一宮町立半津児童館建設工事に伴ない発見された古墳についての発掘調査記録であります。

発掘調査は、一宮町教育委員会において担当することとなり同年夏、岡山県教育委員会の指導のもとに、半津古墳発掘調査団が下記のとおり組織され、その作業が委託されました。

|       |      |
|-------|------|
| 團長    | 鎌木義昌 |
| 副團長   | 深井正則 |
| 庶務・会計 | 黒住正文 |
| 團員    | 馬場誠  |
| タ     | 原田幸久 |
| タ     | 宮下正人 |
| タ     | 宮脇春一 |
| タ     | 住田孝一 |

その後、昭和46年1月、一宮町が岡山市に合併され、この発掘調査の報告書作成の課題が岡山市へ引き継がれました。岡山市教育委員会では、発掘調査団長鎌木義昌氏と連絡を続けながら、昭和52年度において、報告書作成費追加分の予算化を図り、このたびの発刊をみたのであります。

この間、長年に亘り、ご指導、ご協力を賜わった調査団長の鎌木義昌氏をはじめ、関係者各位に対し、記して謝意を表す次第であります。

昭和53年3月

岡山市教育委員会文化課

# 図 版

図版 1



発見当時の古墳

図版 2



①② 石室出土状況





⑪ 石室



図版 4



⑪ 石室 内





①② 石 室 壁 面



図版 6



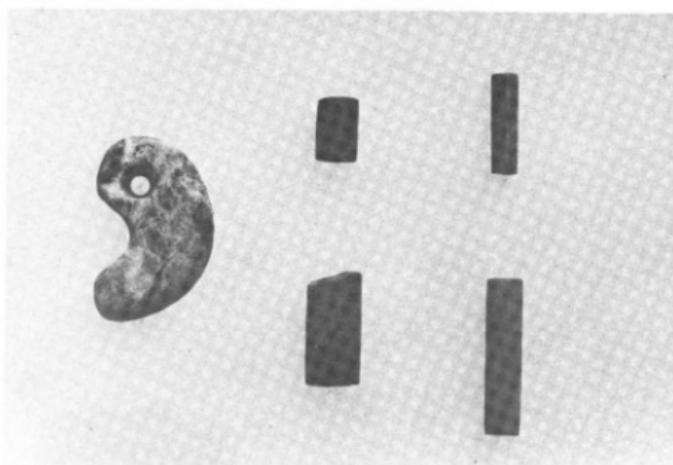
① 石室北壁面



② 石室外の掘り方



① 石室外北部の握り方



② 遺物

図版 8



①② 石室下部の敷石



柏津古墳発掘調査報告

昭和53年3月31日

発行 柏津古墳発掘調査団  
(団長 錦木義昌)

印刷 伸輝印刷